

春夏秋冬



新世界より思うこと

森田 壮平 MORITA, SOHEI

President
Mitsui Chemicals America, Inc.

アメリカとは縁が薄かった私が突然ニューヨークへの赴任を命ぜられ早2年半が過ぎようとしている。思えば21年前、「古豆腐屋」と言った方が通じると先輩から言われた「フィラデルフィア」での二ヶ月間の語学研修が初めての海外出張、そして初めてのアメリカであった。途中、アラスカ上空から見た前人未到の雪の山々に心ときめかせ、悪路を走りぬけるバスからマンハッタンが見えたときには感激で背筋がぞくぞくしたのがまるで昨日の事の様で、思えばそれが今、ここNYという所に居る私の原点であった。赴任する直前まで年の三分の一は海外出張とまさに「亭主元気で留守がいい」を実践していたが、海外に住む、それも単身はまさに初めてで、部屋からのイーストリバーの眺めも当初はその美しさに感動こそすれ時には寂しさを誘う眺望となり、はからずも酒の量を増したものだ。

そんな中でもいやおう無しに時は過ぎ行き、日本とは全く異なる世界、文化に戸惑いながら楽しみながらの日常が繰り返され、ようやくわずかずつだが自分の存在場所を見つけつつある。過日、ポストン出張の折にプリマスに寄る機会があり

メイフラワー号とビルグリム達が生活を始めた場所を訪れた。あの小さな帆船に102名のビルグリム達が乗り込み約2ヶ月の航海の後、ようやく本来目指したNYではないプリマスにたどり着いたのが1620年。過酷な冬を耐え忍び生き残った者は半数以下と聞く。もっとも移民自体は1607年に始まったらしい。1609年にはすでにヘンリー・ハドソンがマンハッタンにたどり着いており1613年にはオランダ人のNYへの入植も始まり1626年にはオランダ西インド会社がマンハッタンを24ドル相当でネイティブアメリカンから買い取った。たずねにせよ多くの国の人々はその事由は様々だがこのアメリカを新世界とし移住を開始したのが1600年初頭で辛酸をなめながら、そして幾多の戦を経ながら今のアメリカが作られてきた。歴史の無いことがしばしば言われるこの国だがこの400年に実に多くのことが起こりこれほど多種多様な民族によって作り上げられた国は他に例を見ない。いままで5千万人以上の移民を受け入れいまだに年間700万人も受け入れられている国も他には無い。

そのことが未だに人々の感性に刷り込まれ、築き上げられてきた比類まれな豊かさと相俟った独特の刺激となって世界中の多くの者を魅了する。ドボルザークがNYへ渡ったのがすでにマンハッタンが商業の中心となり多くの建物が建てられ、

人々でごった返していた1892年。この「新世界より」は故郷ボヘミアの古典的音楽にアフリカ系アメリカ人やネイティブアメリカンの音楽が見事に融合されてヨーロッパの古典的交響曲として完成され、まさに今のアメリカの姿と重なる。仕事柄、出張は多いがLG空港に戻る際に機上から眺めるマンハッタンは美しいくらい勢いがあり一見摩天楼がその目を奪うが実はその中に展開する古い街並みが好きで休日にはよく歩き回っている。チェルシー、イーストビレッジ、ソーホー、トライベッカなどカーブストアイアンの古ビルと石壁、古きよき時代の面影を今に映し思いをはるか昔へ、飽きることがない。最近ブルックリンの住宅街なども散策場所でこれまた独特の住居が連なる。会社のオフィスはウエストチェスターにあり豊かな緑に囲まれている。ニセアカシヤが花をつけると我が故郷の北海道を思い出す。植生が似ているせいか多くの場所で感じるが多い。そう、景色以外も北海道はアメリカと似ている。多くのパイオニア達が人植し大雑把な中にも自由な感性を育ててきた。原住民と言われるアイヌとの文化融合もなにか似ている。多くの人々が新天地を求め人生を賭けてきたアメリカ、そしてNY、マンハッタン、今、ここに住んでその時代、その人々に思いを馳せる時、私の底辺にある開拓者魂が全身にみなぎってくるのを感じる。